様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３３９１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２３８８

研究課題名（和文）嗅覚の表象から考察する２０世紀初頭イギリス・モダニズム：身体と都市をめぐって

研究課題名（英文）Mapping the Olfactory: Modernist Representation of Body and the City in Early 20th-Century England

研究代表者
伊藤　裕子（Ito, Yuko）

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：５０４３４５６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、西欧における香りの文化史の考察に始まり、20世紀初頭イギリスモダニズムのテクストを嗅覚の表象の観点から探り、都市構造の仮想的イメージや人間の身体性のイメージが、テクスト内で嗅覚の表象によっていかに操作されたかを調査した。嗅覚表象は、都市、身体、ジェンダーについての既成概念を覆すために仕組まれ、悪臭表象が意図的に取り込まれたのだ。においという感覚に付随する従来の価値観転覆のため、嗅覚表象が策略的に使用されたことを明らかにした。他方でテクスト中の無感覚に着目し、帝国主義的地理観における非文明性や父権社会下の女性の抑圧された位置づけを帳消しにする、麻痺した感覚の持つ脱構築性を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の意義は、1910年から30年代イギリスモダニズムが、芳香、悪臭など様々な嗅覚的表象を意図的に取り入れ、嗅覚の感覚に付随する従来の価値観を覆すために戦略的に使用したことを明らかにした点にある。この時代の多様なテクストが、都市空間、新しい芸術、第一次世界大戦などの経験を経て、斬新な感覚や思考をもたらす媒体としての嗅覚的表象を生成した点を評価したことに本研究の重要性がある。
　においの多様性、多方でにおいの隠蔽文化とが相まって、においの表象とその意義は進化しつつあり、文化的な再定義を余儀なくされる現代であるが、本研究の社会的意義は、その前段階における嗅覚的表象の構図の一端を論じたことにある。

研究成果の概要（英文）：　This study began from the examination of the Western cultural history of odour, and explored the text of early 20th century English Modernism from the context of olfactory representations. It investigated how the olfactory representations, which were designed intentionally by the modernists, manipulate the virtual image of city structure as well as the image of human body. The olfactory representations are considered to be a plotted devise to undermine ideas of established system including old notions of city structure, body, gender, etc., by deploying good scents as well as bad ones.
　Moreover, this study investigated the subversiveness of paralysed senses that nullify the repressed position of the uncivilised under imaginative geography of imperialism as well as that of women under the system of patriarchy.

研究分野：イギリス文学、表象論

キーワード：嗅覚的表象　英国モダニズム　都市空間表象　無感覚の表象　第一次世界大戦と嗅覚　ヴァージニア・ウルフ　ブルームズベリー・グループ　身体論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）嗅覚という感覚は 19 世紀以来、極めて原始的で動物的な感覚の一つとして言及されてきた。嗅覚的刺激とは対照的に視覚が重みが増してきたことで、西洋文明の中では嗅覚は軽蔑され、悪臭が疫病の原因となり得るという説のもと、においは脱臭化され、衛生概念によりコントロールされてきた。近現代社会において、においの人工的な操作可能性が顕著になった頃とイギリスモダニズムの時期は重なり、文学テキストにおいても嗅覚的表象を仕掛けとして用いる例がみられたが、こうした観点からの十分な考察はなされてこなかった。

（2）19 世紀から 20 世紀の世紀転換期においては、においは作り出されるべきクリエイティブなもの、虚構性をおびたもの、美学的な価値を持ったものとして新たに認識され、においのフィクション性が浮き彫りにされてきた。嗅覚的表象とモダニズムとの間に内在する関係を探ることによって、当時の都市空間と身体に対する嗅覚的表象の意味操作について明らかにし、そうした、においの表象を使用することによるモダニズムの策略の意味を新たな側面からとらえ直すことが可能になると予測した。

２．研究の目的

（1）20 世紀初頭イギリスモダニズムは 19 世紀の芸術形式に対する転覆的効果を生み出すために、文学、絵画、室内装飾といったテクストに新しい意味付けを行ってきた。なかでも彼らの身体表象はモダニズムの研究対象として重要である。なぜなら、それを用いて彼らは 19 世紀の倫理的身体観への反抗を試みたからである。それは倫理的にかなった美学への反抗精神でもある。テクスト中に描かれる様々な想像的な身体と空間に、嗅覚的表象はいかなる影響を与えているかを探り、モダニズム的手法としての嗅覚的表象を考察し評価することが本研究の目的である。

（2）悪臭と都市整備そして大戦はモダニストに斬新な空間的想像力をもたらし、ロンドンの都市空間を再定義したことについて、テクスト分析による証明を試みた。嗅覚的表象を介して表現される身体観そして都市を読み直すことにより、近代的都市の発する未曾有のにおいが必然的に変革することになる身体観を探り、既存のモダニズム身体論に対して新たな視座を提供することが本研究のもう一つの目的である。

３．研究の方法

(1) 本研究は現地調査にて収集した種々の文字テクストおよびイメージなどの視覚的資料のテクスト分析という方法を用いた。それらのテクストは、文学、嗅覚文化、舞台芸術、身体表象、ロンドン近郊の地誌、マス・オブザベーション・プロジェクトを含み、こうした第一次資料を知覚表象論、モダニズム研究論、身体論を踏まえた上で分析し考察を試みた。

(2) それにより、20 世紀初頭における嗅覚的表象がモダニズム身体観ならびに都市空間幻想に及ぼした影響を明らかにし、モダニズムが嗅覚的表象を文学作品などに組み入れることで、革新的な芸術思潮を体現した点を、上記 (1) にて言及したテクストを分析することにより検証した。

４．研究成果

(1) イギリスにおける、都市やその他の地域の悪臭の記述、またイギリスにおける香料、香水の歴史、製造方法、香料の文化、現存する香水商の広告、においにかかわる批評文献などを調査し、本研究の射程範囲である、20 世紀初頭の嗅覚的表象を相対的に位置付けるための文献調査を行い、特に、においとジェンダー的イメージとの関わりを考察した。成果は論文として公表した。

(2) これまでのモダニズムの研究史の中でも十分に検討されてこなかった嗅覚的表象に注目し、ヴァージニア・ウルフの小説において、テクスト中の嗅覚の表象が社会的階層を醸し出す空間構造の序列を覆すために利用され、語りが嗅覚的表象を用いてヴィクトリア朝中流階級の住居の空間性と、理想化されたイギリスの田園空間のイメージを顕在化すると同時に、新たな都市および田園空間表象の構築を試みていることを明らかにした。ウルフは嗅覚的表象を独自の芸術的表現に、時には意識的に、時には意識的ではないにせよ、取り込んだ。ウルフの語りの戦略は、臭気を放つヴィクトリア朝の家屋、あるいはそれが暗示する家父長制家族からの女性の解放を支援し、身体とにおいとの新たな関係性を築いたといえる。モダニストの美学は悪臭を活用して嗅覚的地図を塗り替え、ヴィクトリア朝の屋敷の空間だけでなく、都市や理想化された田舎の空間と、それらの地下空間という問題をはらんだ層との位置関係を表面化させる。同時にその嗅覚的地図は、ヒーロー的な登場人物を伴った目的論的到達点を持つプロットというマスターナラティブを分断化する。女性解放と香り、さらには身体観との関係についての考察を通して、モダニズム的手法としての嗅覚的表象を評価し、成果を論文として公表した。

（3）20 世紀初頭イギリスにおいて本土攻撃も含む最も衝撃的な戦争であった、第一次世界大戦とその記憶に関わるにおいについて、モダニズム文学の中の嗅覚的表象を検討することにより、苛烈な戦争記憶とにおい、またにおいとその記憶の無意味化との関係についてヴァージニア・ウルフのテクストを中心に分析した。芳香の表現はなく、漂う悪臭、おぞましい食事の場面、病気の人、汚い洗濯物、死にゆく動物などのにおい、屋敷の中のシンクや地下室の悪臭などの強烈な嗅覚的表象は、登場人物だけでなく、読者の感覚や食欲をも萎えさせる。同時に、空襲時に家の地下の黴た貯蔵庫に隠れた戦争の体験がにおいと共に語られる物語中のシーンでは、酩酊と悪臭とによって感覚および戦争の痛みが麻痺したことを示すのか、何らかの意味付与を受け付けない表現であると考えられる。テクスト内の脈略を排除し、因果関係の無意味性を表出させ、悪臭を表面化するが、その意味付けを拒否したテクストは、悪臭と下層を結びつける社会制度の転覆を内包する。芳香と上流階級、悪臭と下層階級、あるいは香水と男性支配下の女性性とを結びつける伝統的な嗅覚における上下関係を覆す手段として、においを用いていることを論じ、国際学会にて発表した。

（4）モダニズム期消費文化と嗅覚との関係をイギリス、フランスにおけるデパート文化とモダニズム文学作品内における商業施設内での嗅覚的表象から分析し、そうした表象が描かれるからこそ生み出される物語中の斬新な主張を検討した。そして、日本におけるショッピング文化とイギリスモダニズムの親和性についても調査した。日本におけるアヴァン・ギャルドの生活と美学をもとめての消費行動とモダニズム文学に描かれた登場人物の消費行動とを比較し、特定の商品を購入するという目的性の希薄な、遊歩的かつ恣意的な買い物文化を両者から認識した。特にヴァージニア・ウルフの街を歩く視点、および都市のショッピング空間における女性買い物客という主体の視点は、かつては男性の特権としてのフラヌール的遊歩でしかなかった遊歩者の視点を女性が奪取していることを示す。そして女性が街を歩くことは、モダニズム期においては、伝統的なジェンダーを超えた行為であり、歩くことによって境界侵犯的な物書きをすることと関わって来る。検討した日本のショッピング文化もまた、女性のエンパワーメントとの関わりの中で評価できる。モダニズム文学内で恣意的なぶらぶら歩きをもたらすのが、物語内における嗅覚的表象である。香りは買い物を過去の記憶に基づく歴史的かつ内面的経験にするが、眼前の現在の光景と相まって複層的な空間像として過去のオリジナルな光景を提示する。現在の瞬間に二重焼きされた形での過去のイメージと感情の差異を伴う再現には、嗅覚の呼び起こす記憶が関わっているのだ。本成果は国際学会で発表し、論文として公表した。

（5）モダニスト文学における、感覚の麻痺、あるいは無感覚に着目し、イギリスと植民地的外国という空間、ひいては文明と野蛮といった二項対立的空間を経験するモダニズム文学作品内の女性の内面分析により、敢えて表面化された感覚麻痺の表現の意図を探った。そして、同時代のフロイトの定義する女性のセクシュアリティと、ヴァージニア・ウルフの小説に描かれる女性のセクシュアリティとの違いに焦点を当て、父権的社会の中で生きる若い女性の生きざまが、フロイトによる女性の定義や制度的思考を逸脱すると位置付けた。 そこには、感覚麻痺の問題に関して、社会的な共感性や、外部の対象からの感情的影響としての情動をも受け入れない内容を持つ文学的表現のあり方が読み取れる。麻痺というよりは、無感覚の表象としての策略的な意義が込められていると考えられる。その無感覚の表象からは、過去との因果関係を努めて逃れようとし、制度的な価値観に基づいた因果関係をも敢えて排除しようとする意図を読み取ることができる。意味付けを逃れた無感覚の表象は、人間の心理の一つの層の表象としての存在理由を与えられたと考えられる。本成果は論文として公表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Yuko Ito	４．巻 98
２．論文標題 Reflections on the 2007 International Virginia Woolf Conference, Miami University, Ohio	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Virginia Woolf Miscellany	６．最初と最後の頁 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 伊藤裕子	４．巻 23
２．論文標題 リサイクルされるヴァージニア・ウルフ－山口はるみと一九九〇年代PARCOのコピー－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 総合学術誌『アリーナ』	６．最初と最後の頁 331-348
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤裕子	４．巻 7号
２．論文標題 表象される嗅覚の地図ーヴァージニア・ウルフにおける身体と空間の想像的構築をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『女性とジェンダーの歴史』	６．最初と最後の頁 32-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤裕子	４．巻 5
２．論文標題 ヴァージニア・ウルフと嗅覚的表象―身体と空間の想像的構築をめぐって―　[研究会記録]	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『女性とジェンダーの歴史』	６．最初と最後の頁 59-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤裕子	４．巻 55
２．論文標題 解釈されえぬ沈黙―The Voyage Out における文明と女性の意識の場所性―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 名古屋大学英文学会『IVY』	６．最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Yuko Ito
２．発表標題 Virginia Woolf Promoting Shopping: A Pioneering Japanese Shopping Centre, PARCO, and its Advertisement in the 1990s
３．学会等名 Recycling Woolf: International Conference, University of Lorraine, Nancy（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuko Ito
２．発表標題 Scents and the Memory of War in Virginia Woolf’s Writings
３．学会等名 The 28th Annual International Conference on Virginia Woolf, The International Virginia Woolf Society, University of Kent（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤裕子
２．発表標題 ヴァージニア・ウルフと嗅覚的表象ー身体と空間の想像的構築をめぐってー
３．学会等名 イギリス女性史学会第28回研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関